平成３０年度秋冬学期　学部生・大学院生共通基幹教育科目　スーパーグローバル大学創成支援事業

「世　界　が　仕　事　場　Ⅰ＆Ⅱ」

―　君は、世界で活躍する先輩にどんな夢を抱いたのか聞いたことがあるか？　―

本コースでは、多様な分野の第一線で活躍する講師が、人生、キャリア、グローバル人材について語る。異文化や海外体験を含む幅広い体験の意義や意味を考え、グローバル社会での生き方のヒントを得よう！詳しくは、後期基シラバス参照のこと。

日時：水曜日４限（14:50-16:20）
場所：伊都キャンパス　センター2 号館 3 階 2307 教室
対象：学部生・大学院生・留学生　言語：日本語（英語での講義も予定）
単位：全１６回２単位　（I 秋学期・II 冬学期　各８回・１単位ずつ　全コース受講を推奨）
問い合わせ：留学生センター准教授・生田博子　Email： ikuta.hiroko.953@m.kyushu-u.ac.jp

- 受講希望者は、１０/３のオリエンテーションに必ず参加すること。
- １０/３１，１１/２８，１２/１９，２/６はグループディスカッションを予定。

１０月１７日　「地図を毎日眺めています」

木田　新一郎　（九州大学准教授）

東京大学 B.S. マサチューセッツ工科大学 M.S. Ph.D.　前職：海洋研究開発機構(JAMSTEC)、ハワイ大学

私は海の研究をしているのですが、ほぼ毎日のように地図を眺めています。 地球科学の研究者は地球が研究対象なだけで世界を相手に仕事をしている、というわけではありません。でも海も広いのでいろんな国の人と協力しながらその中で起きていることを把握することになります。留学体験などを交えながら、研究者の世界ではどう地球を科学しているのか、お話ししたいと思います。

１０月２４日　「グローバル化時代に求められる人材」

岩本　渉　（アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長）

東京大学 B.A. パリ大学 D.E.A.　前職：文部科学省、在仏日本大使館、ユネスコ他

グローバル化に対応できる人材ということが言われて久しいが、語学が出来、コミュニケーション能力があればよいのだろうか。文化的差異の理解についてはどうなのか。またその人材は、地域社会を担う人材とは全く違う人材なのだろうか。 通算 13 年間海外で学び働いてきたが、まだ結論は出ていない。 これらについて、多文化共生や持続可能性といった事柄とも併せ考えていきたい。

１１月７日　「イメージトレーニングのすすめ」

吉川　謙二　（アラスカ大学教授、探検家）

琉球大学 B.A. 北海道大学 M.S. Ph.D.

まだ大学院生だった頃、南極隊や北極隊を組織した経緯や、それがその後どのように人生やキャリアに影響して来たのか？人生のイメージについて、考察する。自分のやりたいことのイメージができたら、それに従順に実行すべきだ。あとは実行に移す時の恐怖心をどう処理するか？

１１月１４日　「グローバル社会って一体何だろう」

島津　正數

九州大学 B.A.　前職：三菱重工（株）他

３７年前、企業の一社員としてシンガポール政府との合弁企業に出向し、競争力を高める国の戦略を民間企業の立場から学んだ。その後、復職し、企業、私立大学、ユネスコ・アジア文化センターでの業務を通じて、企業の発展、持続可能な社会の実現に向けて働いている人々を見てきた。グローバル社会とは一体何だろうか、世界が求めている人財、日本が求めている人財とは一体何だろうか、日本は「特殊な国」になっていないだろうか、私が感じていることをお話ししたい。

１１月２１日　「毎日がドラマ：起業ほどクリエイティブなシゴトはない」

村山　由香里　（株式会社アヴァンティ代表取締役社長）

九州大学 B.A.　　前職：（株）ノエビア他

あの時、なぜ 34 歳の何の後ろ盾もない女性が自宅で起業することになったのか。男女雇用機会均等法成立前に九州大学を卒業し、社会の底辺で生きてきた。起業後、危機の中からつかんだミッションは「世界中の女性たちとネットワークを結び、新しい時代を創る」。起業体験とともに、女性活躍への思いをお話ししたい。

１２月５日　「心の中に平和の砦を築くとは？」

山下　邦明　（JSPS バンコク研究連絡センター長）

上智大学 B.A.　　前職：ユネスコ他

「戦争は人の心の中で生まれるものだから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」というユネスコ憲章の言葉と出会ったのは大学 2 年生のとき。それ以来、半世紀近く NGO、国連機関、大学、政府間連機関等で働き、多くの国の様々な人々と出会い、協働してきた。その経験を聴講生の皆さんとシェアする時間にしたい。

１２月１２日　「グローバル・シチズンシップで繋がる未来」

辰野　まどか　（GiFT グローバル教育推進プロジェクト代表理事）

聖心女子大学 B.A.　SIT Graduate Institute M.A.　前職：（財）青少年国際交流推進センター他

「世界をよりよくする志」であるグローバル・シチズンシップとは？　一緒に考えていきたいと思います。また、学生時代の体験が、今の GiFT の活動に繋がっています。Comfort Zone（いつもの居心地のいい場所）から Learning Zone（成長する場所）へ。その一歩から生まれた未来について、お話しします。そして一緒に未来をイメージしてみましょう！

１月９日　「21 世紀のエスキモー・イヌイット：伝統と開発の狭間で」

生田　博子　（九州大学准教授）

アラスカ大学 B.A. M.A. アバディーン大学 Ph.D.　前職：アラスカ州政府野生動物魚類管理局他

２０代半ば、東京の金融機関で働いていた私は、北極圏の人々と生活がしたくて人類学者になることを志し、一昨年まで約２０年間、米国政府で働きながらアラスカで生活した。北極圏は、 石油など豊富な天然資源の開発が国や地域の経済を支える中、先住民族は伝統的な狩猟生活を守ろうとしている。グローバル化の進む現代社会における持続可能な社会とは何か、共に考えよう。

１月１６日　「途上国・紛争地の子どもに教育を：現場の実践と研究を架橋する」

小松　太郎　（上智大学教授）

上智大学 B.A. ロンドン大学 M.A. ミネソタ大学 Ph.D.　前職：国際連合コソボ暫定行政ミッション他

世界で教育を受けていない子どもたちは 6000 万人、その半数は紛争に影響を受けた社会に住んでいます。彼らの教育機会を保障するために、私は、政府系援助機関（JICA）、国連専門機関（UNESCO）、紛争地での国連ミッション（UNMIK）などに勤務しました。多様な世界を「肌で」知ることは大切であり、それは自身の生き方を見つめる貴重な機会ともなり得ます。

１月２３日　「様々な開発支援の形：支援を担う人をサポートする」

稲村　次郎　（九州大学特任教授、JICA）　早稲田大学 B.S.

開発途上国を支援すると聞くと、国連を始めとする国際機関や様々な分野で活動する NGO を思い浮かべることが多いと思います。そのイメージと裏腹に、開発支援の現場では、様々なキャリアを持った方が、民間企業、地方自治体、青年海外協力隊といった様々な組織に所属しながら、ご自身の専門性を生かしながら活動をしています。様々な協力のうち、日本の政府開発援助の現場でどのような方が働いているかを紹介し、様々なキャリアが国際協力につながることをお話ししたいと思います。

１月３０日　「どこだって『そこが世界』の幸せ」

長野　剛　（朝日新聞社記者）　京都大学 B.S. M.S.

学生時代にバックパッカー旅行にはまり、世界を飛び回る仕事に憧れ、選んだのが記者でした。が、この２１年、仕事で国外に出たのは合計１月半程度。相変わらず国外の仕事に憧れていますが、実は案外、今の仕事も「世界」とともにあると思っています。その原点は、アホで生意気な「日本の学生」だった私を一人の「若造」にしてくれた旅先のおっちゃんたちだったと思っています。そして、それって結構、幸せな感覚なんです。語り合いましょう！